

長田華子、金井郁、古沢希代子編(有斐閣、2023年)

## フェミニスト経済学 経済社会をジェンダーでとらえる

新井 美佐子\*

アダム・スミスが祖とされる経済学は、二世紀半に及ぶその歴史において諸学派の成立を内包しつつ展開しているが、それらのうち新古典派経済学が主流と見なされて久しく、その反映が(経済学)教育にも認められると聞く。こうした状況もあってか、あくまで評者の推測だが、少なくとも日本ではフェミニスト経済学(以下、引用箇所等を除きFEと略記)は経済学部(卒業)生の間でもあまり知られていないだろう。経済学と同じく十八世紀に源流を求め得るフェミニズムに基礎を持ち、名乗りを上げて三十年が経過したFEの日本語による初めての教科書が本書であり、九名の女性研究者が研究会を重ねて書き下ろした。

全体は二部構成となっており、「第I部 理論と方法」(第1～5章)では、主に新古典派経済学の分析方法や射程の批判を通じて「フェミニスト経済学とは何か」が説明される。すなわち、新古典派経済学が措定する「合理的経済人」——「子ども期は存在せず、誰にも依存せず、他者の生存に責任を負わず、他者の効用とは無関係に自己の効用を最大化する」(6頁)——なる実存しない人間像に対し、FEでは「関係性のなかにある個人(individuals-in-relation)」を仮定し、(他者との)関係が結ばれる場として「フォーマルな市場経済」のみならず、「インフォーマル経済や市場以外の領域」をも分析の射程とする(7頁)。そして、「人間のニーズ(必要)を満たす財やサービスがいかに提供され、1人ひとりに届くのかというプロヴィジョン」(8頁)を重視し、このプロヴィジョンが「問題なく遂行されて」、万人の「ウェルビーイング[(well-being)。本書では「暮らしぶりの良さ」と定義(3頁)]が高まることを、経済的な成功ととらえる」(9頁)。このように現在の主流派経済学とは分析枠組みを大きく異にするFEは、前者に比べ現実の経済社会により迫り得

ることが期待できる。なお、「フェミニスト」経済学と聞くと、女性のための経済学と捉えられるかもしれないが、フェミニズムとは「女性に限らず、男性、子ども、高齢者などの万人」の「ウェルビーイングの向上をめざすものであり」(3頁)、FEはそうした「フェミニズムの視点から経済学をとらえる学問」とある(2頁)<sup>1</sup>。

続く「第II部 領域と可能性」(第6～14章)では、「労働市場」「マクロ経済」「ジェンダー予算」「福祉国家」「金融」「資本・労働力移動」「貿易自由化」「開発」「環境・災害」の章立てで、FEの具体的内容が既存研究の紹介を織り交ぜつつ示される。第I部、第II部とも丁寧な説明と分かりやすい例示となっており、経済学を学んでいなくても読み進めるのに大きな困難はないだろう。

その一方で、特に経済学の既修者にはFEに対して疑問を覚える点があるかもしれない。それらのうち、ここでは本書でも言及されている二点について取り上げたい。第一は、FEが「学際的で考察の対象が幅広いことから、経済学ではなく、社会学ではないか」(7頁)と捉えられる可能性である。これに関しては、FEは「すべての社会現象を研究対象とするわけではなく」(8頁)、また先述の、FEが重視するプロヴィジョンが本稿冒頭に挙げたA.スミスを含む古典派経済学と通底することから、経済学であるとの認識だと言う(8～9頁)。確かに新古典派経済学では、経済学を科学(Economic Sciences) 足らしめんとして実在の人間が有する様々な特性・属性、あるいは制度や歴史的背景等を大きく捨象してきたが、非主流派と称される諸学派ではFE同様、考察の対象が市場に限定されてはいない。

第二は、FEが「1つのまとまりとなる学問体系をめざしているわけではない」(4頁)点である<sup>2</sup>。経済学の諸派は、分析に当たって独自の概念等を

\* 名古屋大学大学院人文学研究科

創出し、理論を打ち立てようと試みる。それに対しFEは、新古典派を含む経済諸学派、ならびにフェミニズム諸派の影響を受けて発展してきたゆえに内包する「出自や立場の違いを認めて、その差異を許容しつつも、ジェンダーによる差別や抑圧は意識改革などで解消される問題ではなく、経済的な利害につながる物質的な基盤が存在しているという認識を共有」(4～5頁。原出所は足立(1999))するに至っており、そのことに意義を見いだす。そして、「世界を鳥瞰する立場に立つ『経済学者』は存在」せず、「現存する世界内における、それぞれの状況づけられた位置からのみ、世界は見るができる」とし、そうした位置の「複数性・多様性を相互承認することにおいてしか」、より普遍的なものはないという意味において「一般理論の構築を目的とするものではない」(以上、足立2015: 181頁)。以上は非主流派経済学においても類を見ないであろうが、こうした独特のあり様こそFEの存在意義がある、あり様ゆえに目的を遂行し得ると言えよう。評者も本書の著者たち同様、経済学に対するFEの寄与を疑わないが、読者の判断はどうだろうか。

各章に要約、「Keywords」「Column」が付され、本文中には関連章番号の提示もあり、章数、巻末の「読書案内」(「小説・エッセイ・映画・ドキュメンタリー」も挙げられている)と合わせ、教科書としての配慮が伝わってくる。今日では多様なジェンダー問題が一般的にも認知されていると思

うが、本書から新たに得られる知見は少なくないはずである。こうした上で敢えて付記すれば、(教科書としては) 価格がやや高いようにも感じた。しかし、本書出版社(有斐閣)の特設サイト上に「講義用スライド」が掲載予定とのことで、(本稿執筆時は「準備中」につき、評者は未見だが) 合点した(文中の[ ]内は評者補足)。

## 注

- 1 参考までBecchio (2019)によれば、新古典派経済学の枠組みを用いての家族や結婚、男女間経済格差等に関する分析は、FEと対置してジェンダー経済学(Economics of Gender)やジェンダー新古典派経済学(Gender Neoclassical Economics)と称されている。
- 2 その上で、「フェミニスト経済学の研究に共通してみられる特徴」五点をもって、「ソーシャル・プロヴィジョンング・アプローチ」と命名されていると言う。詳細は本書9～11頁を参照されたい。

## 参考文献

- 足立真理子, 1999, 「フェミニスト経済学という可能性」『現代思想』第27巻第1号, 105～113頁.
- 足立真理子, 2015, 「経済学に女性の居場所はあるのか——フェミニスト経済学の成立と課題」八木他編『経済学と経済教育の未来』第7章, 桜井書店.
- Becchio, Giandomenica, 2019, *A History of Feminist and Gender Economics*, Routledge.